

---

# ジンとオルクの旅

カカカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジンとオルクの旅

### 【Zコード】

N7034Z

### 【作者名】

力力力

### 【あらすじ】

この大陸「フィングラン」ではかつて神と魔龍による戦争が行われていた。

その戦争が終結した今、新たな時代を楽しんでいる人々に魔の手が迫る。

## プロローグ 神と魔龍

今は昔の話、この大陸『フィングラン』では神と魔龍による戦いが、長きに渡つて行われていました。

神はこの世界を作り出した創造主です。神はこの世界での自分の奴隸を作るために、様々な生き物を作り出しました。

人間、植物、海洋生物・・・そしてドラゴンです。そのドラゴンの中でも、特別に力が与えられたドラゴンが魔龍でした。

神に作られた生き物達は、神の奴隸となりながらもそれは幸せに暮らしていました。しかし、100年も前のこと。神が突然私たち人間をこの世から消そうとしたのです。人間が理由を聞いても、神は教えてはくれません。人間がいくら命乞いをしても、神は聞き届けてはくれません。

人間は最後の手段として、魔龍に神を倒すように頼んだのでした。すると、魔龍は人間たちの力になつてくれたのでした。そうして、神と魔龍による戦争が始またのです。

神は独りしか居ませんでしたが、その創造の力を使って魔龍たちを追い詰めます。しかし、大勢いる魔龍達は戦意を鈍らせることなく奮闘しました。

そうして神と魔龍達の戦いは50年の間も続きました。

しかし、物語に終わりがあるように、この戦争にも終わりは訪れます。

魔龍達のほとんどは神にやられました。残つたのは魔龍達の中でも特に力が大きかつた7体だけです。

そして、神と魔龍の最後の戦いはこの『フィングラン』で行われました。

追い詰められる魔龍達は、最後の力を振り絞り、神を封印することに成功しました。

自分の命を引き換えた魔龍達の魂はこの世から離れていったの

です。魂の無くなつた魔龍達の体はこの世に残つています。人間たちは感謝の意を込め、魔龍達を弔おうとしたとき魔龍達の体から淡い七色の閃光がほとばしり、魔龍達は上空に消えていきました。人間たちは不思議な現象を目の当たりにしながらも、こうして生き延びることに成功したのでした

「お終い。」

しわがれた老婆の声が、言い伝えの終わりを告げる。老婆の傍でそのお話を聞いていた少女は、田を輝かせる。

「お婆ちゃん、お婆ちゃん、もう一回そのお話をしでー。」

「ああ、いいよ。」

老婆は少女の頭を撫でながら、もう一度言い伝えの話を始めた。

## 第1話 ジンとヒイリーとオルク

澄み切つた青い大空に黒い龍が飛行していた。その黒い龍は真つ黒な鱗を太陽に照らすように飛んでいる。翼や頭は漆黒だった。

その龍の上に一人の人影があつた。

一人は真つ黒な髪を持ち、龍と同じような漆黒な瞳をする少年だった。年は15歳くらいで、顔は整つていてイケメンだった。この少年の名は「ジン」。

もう一人は真つ白な髪をする少女。雪を溶かしたように白い髪がかなり印象的だ。人目を引くその少女はかなりの美少女だ。年は10歳くらい。この少女の名は「ヒイリー」。

そして、この黒い龍の名は「オルク」。

この二人と一体は旅をしている。縛られるものは何もない、自由で快適な旅だった。

ジンは退屈そうに、腕を上に真つ直ぐ伸ばし欠伸をする。ヒイリーは暇を持て余すように少年に声をかける。

「ねー、ジン、何か面白いことない？」

可愛らしく高いソプラノの声で尋ねてくるヒイリー。そんなヒイリーにジンは無愛想に答える。

「・・・そんなもんがあつたら、俺は今頃退屈してねーよ」

ヒイリーは無愛想に返されたので、怒って顔を膨らませる。「そんなことは分かつてるけどー」なんて言つている。

ジンはヒイリーを相手にしないで、龍の体から身を乗り出し地上の様子を見る。

何か面白いことがないか探すためだ。地上は見渡す限り縁しかない森だった。

少年は首を左右上下に振り、森の中をくまなく捜す。視線をオルクの進行方向に向けたとき、うつすらと皆が見えた。ジンは嬉しそうに声をあげる。

「おい！ヒィリー！国だ！新しい国を見つけたぞ！」

それを聞いたヒィリーは顔を輝かせる。トテトテ、と可愛らしい音を立てながら小走りをして、地上を見下す。ヒィリーは天使の様に輝かせている顔を、いつそう輝かせる。

「あー国だ！ジン！あそこに行こ！あそこ！」

ヒィリーは年齢に見合つた、はしゃいだ声を出す。ジンも嬉しさで顔を微笑ましている。

「オルク！着陸だ、着陸！今からあの国の近くの森に着陸だ！」

「オオオーーオオン」

ジンの命令に答えるように、オルクは鳴いた。オルクは次第に降下していく、近くの森に着陸する。

「よつとー！」

ジンとヒィリーはオルクの背中から地面に飛び移る。ジンはオルクの方に向き直り、囁く様な声を出す。

「オルク、いつもみたいにここでお留守番してんのだぞ。また大量に食料を買ってきてやるからなー！」

「オオーン」

ジンとヒィリーはオルクに背を向け、新たに見つけた国へ向かう。

## 第2話 ジンと黒い魔法

ジンとヒィリーは新たに見つけた国の城門にたどり着いた。

城門の番人がジンとヒィリーに気づき近づいてくる。門番は人目を引く容姿のジンとヒィリーの姿を見て戸惑う。そして、主にヒィリーの事をチラチラと見ながら、入国検査をジンとヒィリーに受けさせた。

今の時代、旅をする者はほとんど居ないのであつた。神と魔龍の戦争以後、人々はさらに平和な世界を得ることができたので、国を出ようと思つものなんて居なかつたためだ。

厳しい検査を受け終わつたジンとヒィリーが、入国を許可される。番人が簡単にこの国について説明をする。

「この国は『ギオス』といいます。農業が豊かない国です」自分でいい国なんていうなよ！ジンは心の中で思うが、もちろん口には出さない。

番人は説明を続ける。

「なお、この国では近頃無法者が増えておりますから、旅人さんもお気をつけください。まあ、警備隊がしつかりしているので、安全でしようが」

「はい、分かりました」

ジンは最低限の言葉で返し、ヒィリーが門番に微笑みかける。門番は一瞬で顔を真っ赤にし、卒倒した。ジンはそれを見て呆れた様にため息をつく。

「ヒィリー、お前わざとやつてないか？」

「えー全然わざとじゃないよー」

ヒィリーは「ほんとだよー」と付け足し一人で城門をくぐつていつた。ジンは幸せそうな顔をしている門番を見て、どうしたものかとまたため息。

これが見つかれば後で大騒ぎになるのだが、どうしようもない。毎

度のことだ。ジンは仕方がなく門番を置き去りにして、城門をぐぐる。

そこは、確かにいい国だった。馬や牛が人につながれ田畠を耕し、子供は母の手伝いをしている。小さい子供は近所で遊び、市場は活気に包まれていた。

ジンとヒィリーはしばしその光景を見とれる。

「いい国だな」

とジン。

「いい国だね」

とヒィリー。

二人は市場へと入り、適当に見て回ることにする。そこには、農業の国ならではの食材がたくさんあつた。ジンはその食材を売つている店主に話しかける。

「おじさん、この肉はなんなの？」

ジンに聞かれて店主は、ジンの指差すものを見て得意げに答える。

「ああ、これが。これはこの国の名産品でなウイリカブ・ロースつてんだ。この国で生産されている小麦粉の中にチーズを入れてな、この国で飼育されてる豚の中に入れて焼くんだ。

最初は強火で一気にジュワワーと焼いて、それから低温でじっくり2時間焼く。そうしてできたのがこれさ。」

話を聞いていたらよだれが出てきそうだった。ジンは我慢していたが、後ろでズズッと口で何かをする音がする。ジンはその正体を知つてるので、これを購入することにする。

ジンも食べたかつたので一石二鳥だった。オルクのお土産にもしたつかたので、軽く10人前は購入する。

他にも色々美味しそうだつたり、名産品だというものがあつたので買つことにする。オルクの分は100人前は買つたであろうというところで、ジンとヒィリーは国を出るために、城門の前にいた。

ジンはその重い荷物を全部一人で担いでいた。しかも片手で色々と。

周りの人々は奇異の目を向けてくる。あそんでいたこどもたちが、ヒィリーはその光景に感心したような、呆れているような声を出す。

「ジンの馬鹿力つてさーすげいよね。」

「馬鹿にすんなよ」

「別に馬鹿になんかしてないよー」

笑いあうジンとヒィリーの足が止まる。それは目の前にいかにも柄の悪そうな男たちが、行く手を阻んでいたからだ。ジンとヒィリーはそれに慣れているかのように、優しい対応をする。

「どちらさまでしようか？お兄さんたち」

男たちの中から、一番体格が大きい人が前に出てジンの言葉に答える。

「おめえら旅人だろ？身包みを全部おいていつでもうづぜ」

その男の言葉に反応して、周りの男たちが君の悪い声で笑い出す。ジンはそんなお約束な言葉を聴き、退屈そうに欠伸をした。丁度周囲には人はいなかつた。唯一の人の門番は國の外で氣絶している。「よいしょ」

人が力を抜くときに出すような軽い掛け声で、ジンは一七はあるそくな重い荷物を地面に降ろす。ズズズズウン……荷物は地響きを鳴らし、大地を一瞬振るわせる。ヒィリーは荷物の後ろに隠れるよにして回り込む。ジンの怪力を見ても、男たちは一向に怯む様子はなかつた。

先ほどの体格のいい男が、ネタバレをする時のような口調でジンに話しかける。

「はつー！どうせそれも魔法の力なんだろう？恐れるになんとやらつてな」

体格のいい男がそう言つた瞬間、周りの男たちは先ほどのよりも一層氣味の悪い声で笑い始める。

この大陸では神と魔龍の戦いの後、『恵みの雨』と言われる光の雨が降つた。その光の雨を受けたごく一部の人は魔法が使えるようにな

なつたのだった。魔法という力を手に入れた人は、犯罪に手を染めるのだった。それを阻止するため、国は一般人の中から魔法を使えるものを警備隊とするのだった。なので、今魔法を使えるものは無法者と警備隊、そしてジンのような旅人ぐらいたつた。

ジンは男たちの声を聞いて背中に虫唾が走る。

「・・・やめろ・・・」

「あつ？」

ジンが静かに呴いた言葉に男たちは笑いを止める。  
しかし、また大声で笑い始める。今度こそジンは、聞こえるようにはつきりと言つた。

「その下種みてーな笑い声をやめろつて言つてんだよーーー！」

ビリビリ・・・空気が震撼した。男達はジンの怒声に笑い声を見たりとやめる。

一瞬、呆けていた男達だがすぐに我に返りジンに向かつて怒り始める。

「なんだと、この餓鬼！」　「ぶつ殺してやるーーー！」　「内蔵引きずり出されてーのかあ！？」等等。

ジンは一度大きく息を吸い込む。

駄目だ！こんなことで取り乱していたら、ジンはまた大きく深呼吸。男たちの言葉など耳に入つていなかつた。

ジンに無視をされた男たちは、怒りのボルテージが最高潮に達し、ジンに襲い掛かった。

「ウラアアーーー！」

10人くらいいる男たちは一斉にジンめがけて襲い掛かる。するとピタッ！と男たちの足が止まつた。

顔から汗を噴出している者もいれば、自然と足が止まつている者もあり、みんなが止まつたから「じゃあ俺もー」で足を止めた者もいる。この男たちの違いは、一つ。ジンの魔力を感じることができたか否か。

ジンの体からは黒いオーラみたいなものが全体から噴出していたのだ。そのオーラが魔力。体から発せられる魔力は強さの証。その量が多いければ多いほど強いということになる。

ジンの体から発せられる魔力は、常人には底知れぬを感じさせていた。ジンの魔力は渦を巻きジンの体の中へと収束していく。

「おら、どうした? こいよチンピラ!」

男たちにジンは軽い挑発。男たちの単細胞ぶりは相変わらずでジンの挑発に簡単に乗る。まず、皆が足を止めたから「じゃあ俺も一派がジンに飛び掛る。

ジンは黒い魔力を拳に纏わせ、それを男達にぶつける。

ドウツ! 黒い魔力はジンの拳の威力を数倍にするだけでなく、男達に当たつた瞬間爆発した。

「ぐわっ!」

数名の男たちが一斉にスタートラインにまで吹っ飛ばされた。吹っ飛ばされた男たちは魔法はおろか魔力を練ることすらできなかつたのだろう。それができるものならば、少なからずジンの力を感じることができるはずなのだから。ジンもそれはわかつており、一応手加減したのだが・・・吹っ飛ばされた男たちはやがて動かなくなつた。

死んだか・・・気絶か、どちらにしても悪いことしたなあ。ジンは心の中で「南無阿弥陀仏」と唱える。

ジンの拳に纏つていた魔力は、敵にぶつかるのと同時に消える。吹っ飛ばされた仲間を見て、自然と足が止まつた派が、ジンに背を向け一斉に逃げ出した。

「お、おい、お前ら!」

残つたのは汗を噴出した派の体格のいい男だけだった。

「くそつ! ふざけんなよ! テメーその反則みてーな魔法は何なんだよ! !」

体格のいい男はジンに向かつて、暴言を浴びせる。

ジンは右手を前に突き出し人差し指を立てる。そこに黒い魔力が集

中していく。

「これは、もう50年も前に消えた魔法……太古から存在する、ある龍の魔法……」

ジンが質問に答えると、体格のいい男は一瞬、ポケツ、とした。そして、すぐに我に返り、ジンの魔法の正体に気づく。

「ま、まさか、その黒い魔力とこの破壊力……まさか、お前の魔法は……」

男は恐怖と絶望でうろつがうまく回らなかつた。ジンは男に最後まで言わせない。

「黒点……！」

ジンの指先に集められていた魔力が一気に噴出す。その流星にも似た黒い光線は、男の胸に風穴を開けた。一瞬で自分の胸に穴を開けられた男は、信じられないという顔で力尽きる。

全てが終わったのを見て、荷物の後ろに隠れていたヒィリーがジンに近づく。

「ジン、やりすぎだよーーあの男の人も死んじゃつてるし。早くここ出よーよ。すぐに警備隊が来るよー！」

「……ああ、わかつてる」

ジンとヒィリーは素早く『ギオス』を出る。オルクの所にダッシュで行き、オルクと共に大空へと旅立つた。

「オルク、これ食つてみろよーあの国の名産品でめちゃくちゃうまいらしいぜ」

オルクの頭にのつかれているジンは、『ギオス』で買った豚肉を差し出す。オルクは大きく口を開け、「食べさせて」とアピール。

ジンはオルクの口の中に肉を放り込む。オルクはそれを美味しそうに食べる。それを見ているジンも嬉しくなる。

ヒィリー やオルクが食べているのを見ていたジンは、自分も食べたくなり口に運ぶ。

「おお！確かにうまいなこのウイリカブ・ロース」  
オルクはジンとヒィリーを乗せ、真っ暗な夜空へ向かって飛行する。  
自分たちには黒が似合つといわんばかりに・・・

### 第3話 魔龍の泉と雷の魔龍

晴れた大空に黒い模様ができる。それはオルクだ。そのオルクの背中にはジンとヒィリーが乗っている。二人は寄り添つように寝をしていた。

オルクは森の上を飛行している。その森の中間地点くらいを飛んでいると、ジンが突然目を覚ます。

ジンは自分がなぜ起きたか分からずに、首を左右に振つて原因を掴もうとする。すると、森の辺りから不思議な魔力を感じ取つた。

何だ？この俺を呼んでいるかのような魔力は・・・

ジンは肌でその魔力を感じ取り、オルクに降下するように命じる。オルクはすぐさま降下を始める。

森をしばらくぐるっと周り、魔力が流れている正確な場所を掴む。魔力が流れている場所をジンが感じ取り、その場所へと向かう。そこは森の丁度中心にあるような場所だつた。周りを木々が囲み、泉がある。その外れに家が一軒建つていた。

ジンとヒィリーを連れたオルクはその家へと向かうことにする。その家から少しあなれたところにオルクは着陸し、ジンとヒィリーを降ろした。ジンはヒィリーをたたき起こす。

何がなんだか分からぬヒィリーに、ジンは状況を搔い摘んで説明し、今からあの家へと向かうことを説明する。

ギギイイイ・・・軋んだ音を立て、見るからに古い家の扉が開く。かなり古いものらしく、扉を開けると家全体が軋んだ音を立てた。ジンとヒィリーはそつと家の中に入り、家の中の様子を見る。家は一室しかない狭いもので、扉を開けるとそこは広間になつていた。素朴な部屋で、部屋にはベットと囲炉裏しかなかつた。

その囲炉裏にはスープが作られていて、囲炉裏の前には寿命があと何年かといふようなお婆ちゃんがいた。

お婆ちゃんが、ジンとヒィリーに向かって話しかける。

「待つておったぞ・・・『黒のドラゴンマスター』よ」

「なにつ・・・」

「」のお婆ちゃんが発した言葉『ドラゴンマスター』、ジンはその言葉に過敏に反応し、おばあちゃんに向かつて怒鳴る。

「そこ」の婆ーどいでそれを知つたーどうして俺が『黒のドラゴンマスター』だと分かつた!』

「・・・今説明してやるから、そこ」に座りなさい』

お婆ちゃんは、どいかからか座布団を取り出しそ、ジンとヒィリーに座るよううに薦める。

ジンは納得しないようだ。『』までの怒りを覚えるジンはヒィリーはのこと以来だつた。そんなジンを見ているヒィリーは、ジンを説得する。

「ジン、あのお婆ちゃんの言う事を聞こいつよ。私あの人人が何か大切なことを知つているような気がするの」

口から出たでまかせだつたが、ヒィリーには何かそんな気がしていだ。ジンもヒィリーの言つたことが、完全な嘘ではないと思い、ヒィリーと一緒に囲炉裏の前に座る。

「私の名前はミト。ミト婆とお呼び」

「婆さん・・・いやミト婆もつときはすまなかつた。つい熱くなつた」ジンはミト婆に先ほどのことを素直に謝つた。ミト婆はそんなことは気にも留めていな様子だつた。ジンとヒィリーはミト婆に自己紹介をし、ジンは本題を切り出す。

「ミト婆・・・『ドラゴンマスター』『』でその言葉を知つたんだ? それになぜ俺が『黒のドラゴンマスター』だと分かつたんだ?」

「・・・少し昔話をしようつかの・・・」

昔々、人間を賭けた神と魔龍の戦い、あれは『』く一部の人間から『神魔対戦』と呼ばれた。生き残つた七体の魔龍は、最後の力を振り絞り神をある地へと封印した。自分の命と引き換えに。

人間たちは、魔龍は滅んだものと思つていたがそうではなかつた。魔龍には子供がいた。まだ生まれてもいなかつたが、確かに魔龍の子供はいた。その魔龍の子供たちは、自分と同時に生まれてくる人間の子供たちを自らの相棒パートナーとすることにしたそう。そうでなければ、龍の子供はうまく力を使つことができなかつたそう。そして龍のパートナーとなつたその人間の子供たちはこう呼ばれた。龍を統べるもの・・・『ドラゴンマスター』と。その人間の子供たちは、龍の力を受け継ぎ龍の力を使えるようになつたとな。

「お終い」

ミト婆が物語の終わりを告げる。ジンとヒィリーはそれを黙つて聞いていた。ジンとしては、自分自身のことだからいまさら驚かない。ヒィリーもジンから聞かされていたので驚くことはない。

「ミト婆、確かにその本当のことだ。事実俺がそうだ。だが、なぜあんたがその話を知つているんだ」

「・・・物語にも出てきた『ごく一部の人間』それはある一族のことでじや。その一族は神ではなく魔龍に使えていた人々。わしはその一族の唯一の生き残りじや」

「魔龍に使えていた人々！？そんな話は聞いた事がないぞ！？」

「・・・当たり前じや。その一族は魔龍にも存在を知られてはいなかつた。存在が知られれば、神は怒りこの世界で天変地異が起きていただろうからな」

ヒィリーは全く話についていけなかつた。知つてていることはジンから聞かされた、最低限の話だけだからだ。ジンはさつきの質問をもう一度する。

「ミト婆、さつきの質問だ。どうして俺が黒のドラゴンマスターだと分かつたんだ？」

「・・・簡単なことじや」

ミト婆はジンやヒィリーの後ろを指差す。ジンは振り返るがそこに

は腐りかけの扉しかなかった。

「この家の外に泉があつたじゃねえ。」

「ああ」

「その泉は『龍血の泉』といつ

「龍血の泉?」

「そう、そこにはわしの先祖が魔龍の血をその泉につけたことが名前の由来じゃ。以来その泉では魔龍が近くを通ると、その魔龍の事をわしらに知らせてくれたんじゃ」

ジンはミト婆のまづへと振り返る。

「ミト婆・・・」

そこにミト婆の姿はなかつた。

「ついて来い、わしがやり方を見せよ!」

ジンの後ろからミト婆の声がした。ジンが再度振り向くとミト婆がいた。

馬鹿な、この一瞬で移動したのか!?

ジンは驚愕の表情をする。だが、今は驚いている場合ではなかつた。ミト婆の後に続き、ジンとヒィリーは家を出てその外にある泉へ向かう。その泉は中央部が黒く変化していた。ミト婆が説明してくれる。

「この泉は魔龍を色で示してくれる。お主の様な黒の魔流は黒いといつた風にな」

「なるほど」

ヒィリーが泉を見て、何かに気づく。

「ねえミト婆、何でこの黒い模様は変化してるの?」

「いいところに気づいたねえ、おじょつけやん」

ミト婆がヒィリーを見る。ミト婆はヒィリーを見て顔を曇らせた。

ヒィリーには聞こえないような小声でジンに聞いてくる。

「お主、この子をどこから連れてきたのじゃ?」

「えつ?」

ジンはミト婆が何を言つてゐるのか一瞬分からなかつた。その後ヒ

ヒィリーの様子を見る。ヒィリーはジンとミト婆の顔を交互に不思議そうに見つめている。ジンはヒィリーのことを説明する。

「ヒィリーは雪の国『ホースノール』で出会ったんだ。この子はその国では生活ができないようになつたんで俺が連れてきたんだ」ヒィリーの事を聞いたミト婆は「やはりそうか」などとつぶやいている。

ジンには何がなんだか分からなかつた。ミト婆はそこで話を区切るように、ヒィリーのことを置き、ヒィリーの質問に答える。「この泉の模様が表しているのはその魔流との距離じや。今この黒い模様が変化しているということは、黒の魔龍が移動しているということじや」

ミト婆の説明を聞いたジンは黒い模様を見つめる。黒い模様は大きくなつたり、小さくなつたりしている。どうやらオルク行つたり来たりしている様だつた。

ミト婆は泉からジンのほうへ向く。

「わしの頼みを聞いてくれんか」

「何ですか？」

「黒の魔龍をここへ呼んでくれんか」

「えつ」

どうしようかな、あまり人に見せるものじゃないけどミト婆は魔龍について知つていることが多そうだし……

「いいですよ」

ジンは人差し指と親指でわつかを作り、それを口で咥える。ピイイイイイイイイイ・・・ジンから鳴らされる口笛の音は、この森全体に聞こえるような大きなものだつた。しばりくすると・・・

「きたつ！」

ジン達に照り付ける太陽の光を遮る様に、空から黒の魔流オルクが降りてくる。

「おお、これが・・・黒の魔龍・・・」

オルクは、ぱさつーぱさつーと翼を羽ばたかせ、ゆっくりと地面に降り立つ。ミト婆が喜びにあふれた声を上げる。

ミト婆はオルクにゆっくりと近づき、ジンに名前を聞いてきた。ジンは「オルクだ」と答えてやる。

近づいてくるミト婆を、オルクは最初不思議な田で見ていた。だが、その後オルクはミト婆に鼻先を近づけた。ジンはその光景を見て一瞬驚く。だが、それもそつかと納得する。

魔龍は人のために神と戦ってくれた心優しき生き物だ。ミト婆はそんな魔龍に陰で使えた一族の末裔。オルクが懐くのも無理ないか・・・

ジンは心中で思い、今日の前にある光景を優しく見守つている。ミト婆は差し出されたオルクの鼻先を優しく撫で、愛しそうに自分の頬を擦りつける。

「あつ！・・・

ジンの後ろでヒィリーが驚いたような声を出した。ジンはヒィリーに振り返る。

「どうしたんだ？」

「これ見てー」

ヒィリーの指は泉の中央に向いていた。今オルクが泉に最大限まで近づいているので泉のほとんどは黒に染まっていた。だがその中で、黒ではない部分があった。その色は泉の中央から少しづつ広がつていつていた。

それは、黒と黄色を混ぜたような色だった。・・・黄色？

「ミト婆、これは・・・！」

ジンがミト婆にどうこうとか説明を求めようと振り返ると、そこにはもうミト婆がいた。

また一瞬で・・・

ミト婆は池の混乱している色を燻しがけに見る。

「これは・・・珍しい」ともあるもんじゃ」

「どうこいつことだ？」

「これは！」の泉に別の魔龍が近づいてきている証拠じゃ」

「なつ！」

ジンは言葉を失った。今までの長い旅の中でジンはまだ別のドラゴンマスターと魔龍に出会ったことがなかったのだから。泉に新しく出た黄色はどんどん広がっていく。

「その魔龍はどんな奴だ？」

黄色の色は、黒い色と同じくらいにまで大きくなる。

「この黄色の色は・・・雷の魔龍じゃーーー！」

「か、雷の魔龍！？」

「ドンッ！ーー！」

大地が震える。その物体が飛来した部分は土が捲れ上がり、少し焼け焦げたような跡がある。

ジンは音がしたほうを振り向く。

そこには魔龍がいた。黄色の鱗をまとい、体からは電光が迸つている。『いつが雷の魔龍だろう。

魔龍の背中から一人の少年が姿を現す。



## 第4話 黒のドラゴンマスターと雷のドラゴンマスター

雷の魔龍から少年が降り立つ。

「黒のドラゴンマスターはお前だな」

黄色の髪をした少年はジンを指差す。

「殺ろうぜ」

黄色の少年が突然がジンに向かつてダッシュ。拳を振り上げジンに殴りかかる。その拳には黄色い魔力を纏っていた。

ドン！ ジンの立っていた場所から地面が盛り上がった。

「・・・・・いいね」

黄色の髪を持つ少年が嬉しそうに言つ。

ジンは殺られてはいなかつた。少年の黄色い魔力を纏つた拳を、ジンは黒い魔力を纏わせた拳で相殺していた。

少年は地面をタンツと蹴りジンから距離をとる。

「我の言葉に答えよ。我が名はライチ。魔龍の名はジルバーン、雷の魔龍。我の望む物は「雷龍剣」（らいりゅうけん）！」

少年が呪文のようなものを唱えると、その手に剣が出現した。少年はその剣を肩に担ぎ、切つ先をジンに向ける。

剣には黄色い魔力が纏つており、バチバチと音を立て放電していた。

「く、りえつー雷刃斬ー！」

少年は剣をジンに向かつて振り下ろす。剣にたまっていた魔力が爆発するように開放される。開放された魔力は剣の形を保つたまま、一直線にジンへと向かっていく。

「……」

「ドウーー！ 先ほどどの攻撃より2倍以上の爆音が鳴る。

「ぐはつー。」

ジンは真後ろへと吹っ飛ぶ。吹っ飛ばされたジンはそのまま木へと激突する。体の衝撃でジンは口から吐血する。

「ジンーーー！」

ヒィリーがジンの元へと駆け寄る。

黄色い髪の少年は剣を虚空へと誘わせ、つまらなそうに咳く。

「ジルバーン、ほんとにはあいつが最強のドリゴンマスターなのか？」

弱すぎだぜ

雷の龍は少年の質問に答える。

「あの少年はおそらく何も知らないのだろう。力の使い方や、これからのこと」

「ふんつーまあ、あいつは戦闘の才能はありそうだな。龍の記憶がないくせに攻撃に魔力を纏わせていたし」

「相変わらず戦闘狂じゃのう、ライチよ」

少年は声のしたほうを振り向く。そこにはミト婆がいた。

「久しづりだなミト婆。俺的にはあんたと戦えると嬉しいんだけどな」

少年は期待するように囁く。だがミト婆はそんな少年の期待を裏切るよつて囁く。

「わしひそんな気はないよ。それよりジンに手を出してもんじやないよ。ドリゴンマスターの手合わせは最低限といつ決まりを忘れたのかいー！」

「大丈夫だよミト婆。こんなことで死ぬぐらいの奴なら、近い未来に起ころる「神魔対戦」で役に立たないだろうからな」「何が大丈夫なのだ？ライチよ」

雷の龍が少年に突っ込む。

「ジン！ジン！大丈夫？」

ヒィリーが必死に呼びかける。ジンはその呼びかけに応える様に体を起こす。

「あ、ああ。」

ジンが体を起こそうとすると、そこに少年がいた。

少年はジンに向かって手を差し伸べる。ジンはその手を素直に受け取り、痛む体を何とか起こす。奇跡的に怪我はなかつた。

「やるじゃねーか、黒のドラゴンマスター」

「そつちこそ、雷のドラゴンマスター」

少年とジンが握る手を離さずに互いを褒め合つ。

何でこの一人をつままで殺しあつていたのに、こんなに仲いいの？  
ヒィリーに素朴な疑問が心にできた。







## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7034z/>

---

ジンとオルクの旅

2011年12月26日22時54分発行